

いふやうな老

世諦の巻

前篇

無明……………一

喚起開発……………一二

処世訓……………一三

後篇

近縁と心光形式……………三七

大円鏡智と衆生の直観……………三九

無明

心靈の光明未だ覺明せず、肉の妄動的意識。

人生の行路、一足先は闇の中の道程にて吾人は一生はいかなる逡巡迂路をたどりつゝゆくや自ら前知すること不可能である。

小兒産れて數月拵籠に倚りて眠むりし姿を見よ。天使を活寫にしたる此眠顔孰か圖らん、此嬰兒こそ將來稱世の強盜と世にしられ囚獄の中に荒師子の猛威を振つて奮迅する凶漢の雛子たりしとは。

實に人生行路何れに向つてか行かん。我行衛人の身上、無明の人生殊に危嶮なるは青年男女の未だ曾て經驗もなき路に意馬心猿の自ら制するに術なく路傍の出來事に全力を賭して一大事の目的を過つこと甚だ勤からず。

ほのかに前途に希望の光認めつゝある身としても肉の妄情に驅られて暫らくは理想

の月だに覆はるゝに至りぬ。まことに誠めても譬むべきは自己の心。

人生の闇路をたどる同じ土産の村里に産出たる小兒數十人共に昔は遊び竹馬に戯れたりし者やがて老い行きて其人々の貧福貴賤その運命さまざまに受ぬれども人界に於て六道のうちにもまた幾千の階級にわかかれけん。誰かはこの小兒等が斯くばかりに種々にかはりゆくものと思ひたりけん。

人は天より賦じたる符函に自己の運命を記識されて生れ來りしにもせよ、いかに己が終身の歴史を自ら識ることを得む。無明のふかき我らに於ては日々自ら開みず覺らで過ぎ行くものを。

人自ら智ありと謂へり。自ら生の從來する處死の趣向する處を知らず。

往昔佛陀世尊の在世に一人りの老公あり。家富み巨萬の財を有せり。世尊彼が命數已に旦夕に逼りしを覺り給ひ、大慈彼を度せんが爲に佛陀自ら其家に訪ね給ひて彼に勸めて度を求めよと説き玉ふに、彼老公曰く、今日家の工事に暇なし。此の營造落成の日に於て願くは再び來り給へ、と。世尊の大悲も此頑迷を救ふこと能はず。世尊空しく還り給ふに其昏夕に彼老公俄然として身まかりぬ。孰か數時間の後を自ら豫知することを得ん。無明のふかき凡夫。

東京一の士族あり。其性貪戾卑吝種々に悪計奸策いたらざるなく、數十年間にして十數萬の財を有すに至れり。彼れが吝嗇自ら我が衣食また惜めり。彼漸く五十にして不義の富初めて得意の地に立ち自から妻を厭憎して離して新たに廿才ばかりの若き婦を娶れり。未だ數月を経ざるに自から腦溢血にて頓死せり。然るに妻はまた百ヶ日を過ぎるに自己の意に適する處の情夫を入れて日々飲食耽嗜數年を出ざるに其産悉く蕩盡せり。憐なるかな。闇路にまでへる人、彼貪戾の夫、不義の財を聚めて彼の奸婦に墮落の種を蒔き置きしなり。

彼鏡血男子其猛虎を欺くような魁偉なる容貌は纖弱なる女性にあまり剛くして剛柔相愛の權衡も衡合しかねてや竟に婦は嫌ふて一度離縁したりしが、然れ共斯くて獨一

の政權に立つて全州を振動せしむる勢力を得るに至るや婦は大に別れたるを悔て再縁を請ひたりしも一度土中に抛たる杯器の水は何かで再び其器に歸らんと。宰相自らさへも此勢力を握掌する運命天より賦せられたりとは曾て圖りたきや。況や明見なき女子焉んぞ數十年の將來を透明することをえむ。

晋の高僧釋道安兒たりし時其容貌甚だ醜劣なりしかば僧師某之を愛せずして其繼僧を日々田園に出だして米穂を拾得せしむと。後彌々道安と其德輝東西に輝き千古に照せり。若し其師僧にして道安に成器を先見するの明あらば焉んぞ其容貌の醜たる其内に蘊包する處の眞價を忘れん。

個人としても人類の歴史としても無明長夜の中に世界の歴史は記されたり。

是神の曾て記したりしを日々に人々開きつゝあるものか、また人自から時し世界の園林に生茂れる根莖に花咲き果は結びけるものなるか。人は其花咲き香ふ時にしてはじめて其色香の芳を知る。

年ごとに咲や吉野の山櫻木をわりて見よ花の有りかを。

我は神にあらず。此生立し稚木に幾ばくの花開き實を得べきは豫知すること能はずまたいかに芳きを得べきかまた臭氣を放つべきかは妄りに豫言すること能はず。しかも旂檀は二葉より芳ばしきの諺を信せざるにはあらず。

眞理は永遠に不易、法性は三世に亘りて改むことなし。世間は原因あれば結果あり結果として原因あらざるはなし。因は必ず縁を待て成立し、縁は能く其原因を資けて萬物を成就せしむ。自然に自然界にも生物界にも悉く因果の常法常然として過たず。萬代にわたりに改めず、大にして天體の無窮より小にして云少なる生物の生滅變化の中に整然として因果律は行はれつゝありしなり。

然れども自然の作せる道は微にして妙、衆生の矇昧なる之を知見するに由なし。故

にはかなくも無明の人生をたどらざるを得ず。

無明 生物心理 意志

人の精神に意志と知力の二面あり。意志の活動は衝動と感情。知力は感覺、知覺及思惟なり。意志は生物發展史によれば生物内の生活即ち心の根本なりとす。

生物の意志は本々目的とかまた手段とかを有せざる盲目的衝動として活動す。

即ち生理衝動、彼らは意識はなきも不識的自然的に盲目衝動として即ち活んとする氣のみにして生活す。知力は脳髓神經の如くに第二次に發展す。

心理學についても人の意志は精神生活發展の根本なり。一定の自己の生活を目的とする意向は生物の本質なり。一定せる生活の意志は知識感情に於て得られたる經驗の結果にあらず。

人生れて人性の意識的發展するまでには三階級をなす。盲目的衝動と感官欲望と理性的意志なり。此らの三階級は生物個人生活と種族生活の保存と進歩にあり。人間も意志未だ意識的に發展せざる矇昧の間は盲目的衝動なり。かくして小兒は何も識らずして乳をのみまた啼き動く。其次に眼耳等の感覺が眼にて視耳にて聞く。それに従つてうごく氣が生ず。この感覺欲は見る物聞く物の向ふ物について感覺してから之を取らんとする如き欲が生ず。

理性意志は理想から生ずる意志にて人間の自我の光としてこの理性によりて善惡を照して自己の感情や行爲を支配す。

生物は原始より漸々に發達し人類に至るまでは意識的の光なく盲目的に生活し來りしものなり。人類にして始めて理性の光によりて自己の目的を定めこれに依りて生活す。

人類には人性の理性を本能的に有すれども小兒は本有の理性未だ發せざるが故に盲目的衝動なり是人性の無明なり。

それと同じく人には佛性本來具有すれども小兒の如くに凡夫はいまだ靈性開發せざ

るを無明と云。是盲目衝動の如し。また不識意志なり。

無明盲目衝動の意志に生死の原理に於て未だ覺明せざる衆生心を無明と云ふ。また覺悟せざる精神なり。之を唯識にはアラヤ識と云ふ。又佛性また開展せざるを無明と云ふ。

喚起開發

心光の喚起は人に佛性あり。如來心光の眞理を聞いて衆生の信仰を母とし如來の光明の眞理を父とし光明名號の聖種となりて信仰心に薫發して宗教心の素因なり。譬へば母の胎内に聖種の下るが如し。

五種の正行ありて能く信仰心を養ふ。

一、禮拜、朝夕懺悔と感謝の誠心を表せる朝夕の拜禮等を以て信念を養ふ。

二、聖經は佛陀の知見し給ふ如來の境界を示し給ふが故に屢々讀む時は自己行者の心も開導せられてつひに之を経験するに至るべし。

三、經に示せる處の如來の好相淨土莊嚴及び如來の智慧聖徳を知見せんが爲に冥想觀を修す。

四、一心に聖名を稱へる時如來我心に來り我心如來に入りて相互に感應して三昧を修す。

五、如來の聖徳を讚歎しまた香華珍膳を献て供養す。

喚起滿位

五聖行を以て信念を修養し、如來の心光に接して心靈覺醒す。喩へば胎兒分娩する如く是宗教心の曉なり。

開發の初期

宗教衝動として如來を天の一方に憧憬するは

ピアトリアに於るが如くプラトンが神を戀ふる。

法華に一心に佛を見んと欲して身命を惜まず眞心の戀慕するに由りて即ち出て爲に説法す。

如來を戀慕して止ざれば

開發滿位形式

信心華開きて佛を知る。心眼開く時は如來の(慈悲力)また淨土莊嚴等の勝相を見ること明鏡を執て面像を觀るが如し。

其内容に於ては如來の恩寵の光あたゝかに融合し入我々入、其内容の妙、大我少我合一し大なる我

開發滿位

如來は即ち小我の本體大なる我真の我なり。如來をはなれて我なく我大我なる如來已に知力に佛を知見し心情に融合し大我に合一意志は靈化し心機一變したる心即ち更生。

法王の子。

我意なく如來の中の我、光の我即ち法王子。

更生し己れば即ち聖子なり。其分に應じて心光を體現す。其自らの行爲と口の言語と思想に如來の光明を行爲に現はす。

自ら如來の光明心と化する時は心浩く體肝かに自然に眞實勝妙樂を感ずれば、世の人が煩惱に惱まざるゝをいかにも感れみて何なりとして

心情には自然勝樂を感ず。いかに窮る困苦も悉く自己を研くの試験十金剛、菩提心堅固なること金剛の如し。また衆生を度す、火も焚く能はず水も刀も碎能はず。

殉教者スラバ、猶太教のホーロの爲に刺殺せらるゝ時に臨んで我を殺し又使せしものゝ罪をゆるせと。

外道ありて龍()を毒殺せんとす、()祖師それを感みて其毒を受けて死

フランシスコは山中に於て不意に一の狼に遇ふ。其に對して云く「吾同胞よ、吾説く所の福音を聞け」と溢るゝ慈悲を以て説法す。ナスガの猛獸も柔順にして聞けりと聖法然（）謗にあふ……

處世訓

同情は社會組織の楔子

修羅 社會は生存競争、自然淘汰競争の外に同情を認めぬ學説の主張者あり。同情もなく人間社會は怖ろしい極端、食物を争ふて、智能のみに争ふは動物的意識的存在としての人を認めるのみ。孔子禮を以て法律外の掟を定めたり。法律で治むるは人。

道德で治むるは天。干戈で治むるは修羅。(武士道)

人には同情。人は生れ乍ら同情。三ヶ年母の哺乳。十五、六歳を親の保護、人生三分は親の保護を受けるは他の動物に勝れて親の子を養育するは親の情を子供に印象して子を社會的動物たらしめる爲と。

同情は男らし

公明正大男らしき行動を表す、眞の同情。孟子の自ら反て縮しからは千萬人と雖も吾往かん。青年が此世に事を成さんとせんに他人の同情を棄る位の覺悟を要す。自らは是と信じたことを斷行すれば世間はデツと見て居る。自ら同情を買はずに得らるゝ。この覺悟は宗教的確信がなくてはならぬ。

聖賢はいかに同情を得たか

世間の八風にかゝらず、神の同情を得ればよい。人生は神と自分との關係。人間の關することでない。ヨシ世人が棄ても神と結び着いて居ればよい。人間の反感を買ても神の同情を受ければよい。之だけの覺悟になれば世の同情なくも安心できる。世間の同情一時受けぬもつひにはうける。生前に受けずも死後に受く。

ヤンの一生は同情少かりしならん。孔子でも其流を傳へたは只一人曾子。

見る人の心々に任せおきて

高根にすめる秋の夜の月

他人の厚意を感ぜざれば同情來らず。

人には有難いと云ふ觀念が乏しい。人から親切をうける、受た時は喜んで居るが忽ち忘れてしまふ。甚しきは受た親切の不足を訴へるものすらある。

同情は積極的なるべし

同情を得る

いかに窮するも尙何處までも正直にして不正不義を行はず、萬事に對して熱誠ならば世の同情を受ける。あの人は逆境に陥入てさへも正を履んで屈しない。誠に感心である」と、

得意の時に

得意の時は裏面に危険が伏在す。失意の時は自ら警戒す。得意には浮足になる。驕慢に流れる。又一方には嫉妬を受ける。隙に乗じて人を()さんとす。得意に世上の同情を受くるは何處までも謙讓の美德を發揮すべし。謙徳は得意にも同情を得。

部下に同情なき人は他より同情を受くる能はず。

いかなる性質の人が同情を得るか。

正義、廉潔、至誠、熱心、勉強、温情の性格

正義、廉潔に基づく同情は威力ある熱誠でなければ同情心を動かすに足らず温情なければ他人の情が映じない。此等を備へざる同情は崩れてしまふ。

森村組、森村市左衛門氏はどんな苦しい思をしても自分の腕でやらふと決心したり天保二枚が食料、十枚が資本、風呂敷を負ふて買ひ出にゆく。私が車をひく、大倉さんが後押をする。氣船に乗ても下等、辨當もかはらず甲板の上に毛布を敷き握り飯を食ふ。そは人に依頼するのがいやだから飽まで自分の腕でやらうと思ふ。神様は私を助けて下さると思ふ。若し私が當時他から金を貰つたり、船上等に乗る自らは獨り車に乗りしては併しさういふやり方では神様の同情を得ない。神様の同情が得なければ偉人及びすべての同情を得ない。しからば榮ゆる能はず。

福澤先生は私の苦しい時に、決して落膽するな。必ず出来る。どこまでも獨でやれ。どんなことが有つても斷じて政府から貰ふなど。是か實に有がたき同情の御言葉と感じたり。

金の如き物質的の助は却て弱くなる。精神的の援助はいか計り力になるか。

私は諸先輩の同情によりて非常に力を得、苦しい逆境に立ても少しも苦しいと思ひ

ません。却つて益勇氣を得て何となく愉快に感じ、店は見すばらしくも仕事は少くも恥かしいと思はず、なさけないとも思はず。なさけないとも思はず。國家の爲である福澤先生は同情して下さると云ふので却て誇る程である。同情の勢力は金の力よりもいかに強いか知れぬ。

天賦を信じて百難中に奮闘。

米國にての非常な艱難辛苦、單身米國の都にて見るかげもない店を開き寢臺もなく函の中にワラを入れて其中に丸くなつて寝た有さま。

片岡直温氏

上半季下半季、上半季は暑中ながい。下はまた社に暖爐あり故に皆勤者多く、上半季は少ない。一の方法案出し上半皆勤を三分の一、下を三分の二とす俄に皆勤者が増へたり。上にたつ人の手加減で下は働く、仕むけようで働く。人は器械でない。

安田翁は獨立出來ぬ五特徵として、

一意志弱く、何事にも氣が移り易い。流行につれてほしくなる。

二輕々しく人の保證をする。

三ひげを取る。

四困難にうち克つこと出來ぬ。

五其行爲不規律。亂雜。

大倉喜八郎氏は韓國に甘萬を投じて商業學校。韓人は言に巧みに事業拙。口の人よは手の人を作ると。

人に接して不快に感ずる人。(増田氏)

I

- 一、肝心な話中わき見する人。
- 二、大切な要談中ふと無関係の話をする人。
- 三、初対面なるになれ／＼しき無作法な言葉。
- 四、皮肉に冷評的の言葉、他人を罵ろうとさする人。

II

- 一、赤いネクタイをした青年にあふ時。
- 二、指輪をかけた青年にあふ時。
- 三、白足袋穿た青年にあふ時。
- 四、金鎖の時計。
- 五、襟から胸へ細い金鎖。

III

傲慢な人、不遜な人。嘲笑の人。愚弄する人。利害に仍つて言語態度を一變する人。

IV

虚飾した人ほど不快。甘言に鋭い劍が潜み、ひきつける力もあり、又嫌味もある、賞るかと思へばけなし、口に奇麗に言て醜い裏のある人。

V

話を眞面目に聞かぬ人

不眠を安眠せしむ。

- 一、就寝前入湯。あまりあつくなくたゞあたゝめる。
- 血液循環をよくす。出て後精神安靜にし、書物など見るべからず。
- 二、就寝して、一深呼吸、二兩足の屈伸、三數息。
- 水の細くしたたるゝを聞く。又小撚を耳へ入まわし、室が閑いがよい。床中身

體の位置を(正)す。

夜中目がさめた時は
一度夜具をのけて冷却し室を四五度歩く、後寝につく。又顔手を洗ひ目を覺して。
入浴より出る時脊骨に水をかける。

ブロームカリ。()
貧血

血を多くする。(ヘモグロビン)(ミルクフード)

人物を見て交際
交際すべき人物の眞價品性を遠觀すべし。單に數多の交を要せず。人物の云何を鑑定し交誼を重ねよ。淺薄なる人は先方の品性を察せず漫に言語を交へ交誼を重ね結果失策。他日後悔。品性を察せず交るは文明の應接を知らざる……

觀察力を要す

愚者は他人の言を聞いて眞面目に受け後日痛憤。識者は斯の如き行なし。自己が愈々語るべきは互に胸襟を開き、然らざれば先方を怒らしめずして遠ざく。故に後日自己の不明を嘆するなし。平生用意周到。他人の行爲の微細までを透明なる眼を以て觀察せよ。此備へなく人を判するは正鵠を失す。

觀察二法

一、客觀的。二、主觀的。用は言語風采。

交

衷心親切、他人に満足と快を與ふ。自然にして虚構御世辭をさけて自然の性情鄭重親切。言ふ處眞實親切。行ふ處誠意。

交の秘訣

「然り」「否」の答辭を明快にす。

清潔、衣も言語も。

交場にて避くべき語

疾病死亡便所等のいまはしき語。

食卓に倚りかゝるは悪し。尤も陋劣の極なり。是食器の載物に倚かゝるものに非ず。是不作法として笑はるべし。

婦人

意志薄弱の者は他人から少し苦を與へらるゝも非常に強く感ず。力弱き者は少の重量にも重く感ずる如く少く他人より刺激を受ければ意志弱き爲に自ら耐へずして直に有力の人に訴へて自己の同情を求む。

交際術。下女下男に對する

正鵠の智識を備へて紳士淑女は、下女下男は劣等の人なり機械的に遇するも差支なしとの念なかるべし。

文明の今日は業に貴賤の別なく人に高下の差別なし。自己の雇使する者に盡すべきを盡せ。彼等も對等に生れたる人なり。只幾多の事情の爲め他人に雇使せらるゝの止むを得ざるため。人情はどこまでも人情なり、人情に主従の別なし。主人の忌はしく感ずる處は従も同じ。自ら彼等を恕れ。

社交の第一歩は下女下男に始まる。彼等に内心慕はれざるもの社會軌が圓滿に交ら

ん。一家の同情心が雇人に博愛、内心に慕るるが肝心。彼等に寛大親切、命令權威叱咤の口吻あるは主人の訓練なきなり。

主人の親切には強情の雇人も抵抗する能はず。命令叱咤を用うれば却つて反抗の色親切なれば従順。

言葉使ひは衷心より親切なれ。

「此品を何處に届けよ」と云に代つて「此品を其處に届て来て呉れよ」と。「早く室内を掃除せなくては困るヨ」でなく「早く室内掃除できぬと差支あるからよ」と成るべく圭角立てぬよう溫和に臨み、斯れらには些細なれども雇人には非常に感じがかる。

命令的は甚だ悪し。野蠻風殊に紳士淑女はさくべきこと。命令叱咤は拙劣の手段。雇人に同情なきものは社會に出て圓滿ならず。

偉大なる人物は謙遜辭讓。只同僚にのみならず下女下男に及ばす。同僚に對する鄭重は尋常の人。自己より身分卑しき奴婢に對して鄭重親切の行爲に出づるは真に奥ゆかしき寛大優婉の作法なり。自己の價値を増加す。

佛國の上流社會は自己の從者に對して對等鄭重を用い、毫も主人らしく構ふる氣を示さず。我子に教ふるに、召任を他に使す時は「頼みます」位の一語は用いよ。召任より品物を取る時は「有りがたふ」と。

文明は自身より地位下きに鄭重親切を表す。

缺點指摘は一大弊害

自ら謙遜なく鄭重親切の行爲なく傲然他人を睥睨し獨尊主義。他人の非行缺點を探し出し非難す。折角の友誼も温まる交際をなさんとするも此一舉を目撃し驚き恐れ寧

親睦ならざるの利を豈り敬遠主義をとらる。如何なる人か多分の缺點なからん。いかなる高遠の人物とても失策なきを保せず。一夕之を指摘し數へ立るに於てはいか

親密なる交情をうべき。

人情の機密を穿て

愛嬌の修養は人情の機密を穿てよ。

他人の長所美點に對して稱揚贊同の言を發す。是却て自己の品位を高む。

歡迎を受けんには先方の欲する處を知り彼を知り己を知る。

孫子曰く 知レ彼知レ己百戰不レ殆。不レ知レ彼知レ己一勝一敗。不レ知レ彼不レ知レ己每戰必敗。交際場裡又然り。他人の心中を忖度する識なくポイントを定めずして不得要領の言語を弄するが故に迂濶にして適切ならず。其言語に光采なく威力なし。

流暢なる談話を訓練す。

流暢の言語は快感を興ふ。自己の品位を高くし才幹に光彩を放つ。

言語は人格を發揮す—音の高低、辭句の明快、態度の作法沈着

感情を操縱する—大武器—無用の言、陰鬱不快の言、他人を苦む。苦心をこらし

明快の言語は自信力に變ず—自ら疚なく恐れず隠せず。決斷力なき怯懦の氣、

満身の勇氣と大膽を要す。

音聲の調子にも注意せよ—高に過ぐるは無禮。非常に高きは狂か醉漢の如し。

低聲私語も見苦し。

肺肝より出づる音聲を貴ぶ。

彼を知り己を知り、

優婉の作法を缺くる結果人格を失はざるよう。自ら快言。他はいかゞや自己の趣味

彼に適するやと。

巧妙の談話は變化を要す。

人は一見して戀愛に陥らず—ジョンラポックが如何なる人も一見して直ちに戀愛に

陥るものにあらず。自己を感動せしむる相當の動機に依て始めて然するを覺ゆと。

着眼、如何にせば歡迎同情をひくべきやを自省

ものとして感せられたり。

一佛國紳士あり、交際の才なく優婉なく他に指彈せらる。自ら矯正せんとして數年

の後交際場裏の明星と仰がるゝに至れり。

予の交際術に得たるは書によると。

社交術は不和の友人を導きて交際を厚からしめ疎遠を親睦にし嚴酷の人を和らぐ。

沈鬱を解き失望に望を興ふ。若し之を失はば十年の親友を一朝に絶交し先輩の信任を失ひ夫妻兄弟も反目するに至る。

大口を開放すべからず。野蠻人は口を開きて坐す。

英國の教訓に『談和の必要なときは宜しく嚴然として口を閉づるを要す』と。

口を開放して閉づる如く下賤陋劣の作法は天下になし。

劣等の品性

他人を誹謗し惡評を加ふるは他人を誹謗冷評する人を快く思ふものは恐らくなる

べし。自己が他を冷評し自己は立派の如くするも具眼者より見れば自己の愚昧を表し

したる即ち自己の頭上に双を加ふる人」

最良の談話は最良の聴客なり

他人が熱誠に語るにも拘はらず之を遮斷して自己の所見を吐露するあり。此は注意

他人が熱誠に語るにも拘はらず之を遮斷して自己の所見を吐露するあり。此は注意

と沈黙の何たるを會せざる下賤野卑の徒、如何なる場合にも他人の自由なる談話を遮る權利なし。

他人の顔を見つゝ語るは文明式の談話法。

注意を拂ふの大なるものにして此上もなき尊敬なり。語る時は全力を傾注せよ。

他に心をうつし顔をそむけ或は書を読みながらは侮蔑するにあたる。

英人は相手が存分言ひ盡さざれば自ら言はず。絶對的沈黙を守れり。

頭上より鐵槌を加ふる勿れ。

益なき言は口外に出す勿れ。

沈黙と注意力は談話の要素なり。

沈黙の眞價

無用を禁

沈黙には注意力の豊富と尊敬を包括す。

饒舌漢は平生饒舌喃喃の必要に迫られても一言も出さず。

饒舌漢の本領は内心を解剖すれば卑怯陋劣薄弱遁辭のあらゆる缺點を網羅するなり

胸中に一片の自信力なく勇氣なき人、萬人に臨んで所信を陳る決心あらんや。

人物を見て交際せよ。

交場に歓迎せらるゝは

一、巧妙の言語。二、不快の感を起さしむ勿れ。満足を與ふるに熟考。初めて交り面白く心地善と思ふことは永く印象

書翰内容

一、明快流暢の文體 最良の秘訣は無用煩雜何の關係なき文字を排し用事の主意簡潔に叙述すべし迂迴屈折岐路に走るな。

平易明快通俗にして高潔なる思想優美婉曲の調子

平易明快通俗にして高潔なる思想優美婉曲の調子

平易明快通俗にして高潔なる思想優美婉曲の調子

平易明快通俗にして高潔なる思想優美婉曲の調子

他人の所感を快感ならしめよ。

(西)人は優等の模範として保存する風あり。

君子は口を慎しみ虎狼は爪を愛す。

婦徳

女子は從順を以て怒らず。良馬は決して跌かず。良妻は決して不平を言はず。良妻と健康とは人間最上の寶玉。婦人の美徳は沈黙を守るにあり。沈黙は婦人最上の裝飾なり。婦人は只静にすべし。才徳ある婦人は美ならずと云ふも家を飾るに足る。

朋友。

君子は先づ擇みて後に交り、小人は先づ交りて後に擇ぶ。故に君子は尤め寡く小人は怨多し。

艱難にあふて初めて眞友を知る。シセロ曰く二心ある友は最も危険なる讐敵なり。

『何人にも朋友たる者は何人にも朋友たらず』

修養

人常に其短所に心を用ひざれば偏執の人と爲る。(ベーコン)

德行

道は天地自然の道にして人は之を行ふものなり。故に天を敬するを以て目的とす。不平は怠惰なる者にのみつきまとふ。怠惰は生者の墳墓なり。怠惰なる人は呼吸すれども既に死したる者なり。

怠惰なる者が勞働につくは盜賊の刑場に趣くが如し。

言語

言語

言語

言語

言語

言語

言語

言語

言語

言語

舌は人の生死を司どる。言ふ者は行ふ能はず。行ふ者は言はず。多言は萬事を擾亂せしむ。言輕ければ損害重し。言ふは言はぬに優る。言多ければ品少し。

物は其音に由て其(損)所の有無を知り人は其言葉によりて其知識を知る。「空き徳利は能く鳴る」

一の目的を定めざる船には順風なし。

衣裳は着人のものなり。世は喜ぶ人のものなり。

知る事最多き者は言ふこと最も少し。

意志強き人はいか成苦痛に對しても他に同情を求め自己の勢力を得んと云如き卑怯あることなし。他に訴へて同情を求むるは卑怯なり。些少の事にも他人に己に對する苦情を其夫に訴へて同情と勢力を求むる如きは卑怯なる婦人によく見る處なり。意志の強き婦人にして同情を求めんが爲に苦情を夫に訴ふる如き所作あることなし。

近縁と心光形式

如來の天心光は遍く法界を照し一切の時一切の處に周遍せざるなし。衆生の信念と交渉し接近不可離の關係をなす故に近縁と名づく。

衆生は此大光明の中に知見を興へられ如來と共に行住座臥一切の處一切の時に於て離るべからざる關係を以て聖き道にすむ可きものなり。如來光の近縁は人の心理の形式の上に於て近く觀し近く判斷し近く感覺し見聞することを得。時間空間の形式に於て常に接近不離の因縁なり。如來の近縁の心光に對する人の心理は觀念理性等の形式を取るなり。如來の心光と衆生の信念とが時間空間の形式に於て常に接近せる因縁となす所以なり。如來の光明とはいかなる本質なりやを知らざるべからず。光明とは嚮に述べし如く如來の光明は物質的物力的にあらずして精神態なりとす即ち一切智一切能の精神態なり。心靈的光明は時間空間及び一切物質を超越すると共に一切萬物中

に存在せる心靈態光明なれば觀念的に萬物中に存在し絶對的同時體なり。如來天心光即ち一切智と一切能との性能、即ち大智慧光明と大悲悲光明とす。此心光に兩性能を具するは譬へば太陽の光線と熱線とに於るが如く決して二線は相離るべきにあらず。然れども其衆生に對する作用には相分たざるべからず、而して此二線を分つときは近縁は大太陽の光線に例して即ち如來の大智慧光なり。親縁は熱線に例して即ち如來の慈悲なり。増上縁とは化合縁に例して如來の慈智をして能く衆生の爲に解脱靈化し玉ふ靈力にまします。

近縁は大智慧の光明にして遍く宇宙を照し衆生の信念光明の法界に周遍し衆生の信念との接觸の關係を攝する相なり。四種に分類即ち是四智なり。

大圓鏡智 衆生の觀念と直觀的の不可離。

平等性智 最高の理性と機能致一的に。

妙觀察智 生佛威感神秘的に。(全一と一切との關係一切と一切の關係)

成所作智 高等なる心靈的感覺に感應す。

如來四智圓明の天心光は本來法界に周遍し照々靈々として常然に照耀しぬるも衆生の無明に翳せられ之を見するに由なし。若し念佛三昧の秘鑰をもつて自己心靈の窓を開く時は如來四智の心光は永しへに照し吾人の信念に交通し本來接近不可離の眞理は自から悟入せらるべし。

大圓鏡智と衆生の直觀

一、寫象を得る故に

二、物體を通して無碍の故に

二、自然

三、いかに開示して識智致一するか

如來の大圓鏡智と衆生の直觀に於て本一致して最密接なる關係を識らんと欲せば先

づ鏡智の體相を知らざるべからず。

絶待、無規定、無碍

宇宙は吾人の認識によれば客觀の物質と主觀の精神との二面ありて存在せる如くなくともこの二象は本來同一質の兩面觀なりと云ふことをうべし。何にとれば客觀の物象は主觀觀念に於て本同一本質の故に吾人は之を寫象することをうべし。本質にして全然異ならば吾人の寫象を可能にする能はざるべし。此二面は同一根底にして之を統一的總體絶對觀念の如來大圓鏡智にして一切の物象は意志に實現せられたる客觀觀念なりとす。故に意志に實現せらるゝが故に物質固形體としてまた時間空間の形式に隨ひ因果律的に生産せり。宇宙一大觀念即ち鏡智の物力現たる自然現象界とすれば一切の萬像は客觀所見の影像にして影像は鏡の本體を離れて別に體あるものにあらず。又世界は觀念態なる故に吾人の觀念には一切の固形態を有するに拘はらずして徹照するにあらずや。吾人が個人的觀念と一大觀念と本質同一なりと言はざるべからず。吾人が自觀し來つた時に内外差別なく本來一體觀にして吾人は大圓鏡智の分たること自から明なればなり。此に於て鏡智即ち一大觀念中の個人觀念にてあれば如來の大智光明と衆生の直觀は接近不可離の因縁なり。例ば鏡智は大虚空の如し。大空に本内外の區別なし然れども若し家屋を造る時は家屋に自から内外あれども空には内外なきが如く而して家屋の窓牖を開かば清氣陽光能く流通す。若し窓牖を閉づる時は室開く氣濁り不快を感ずる如く、吾人の心靈の窓開く時は如來鏡智光明の中に十方洞然として無碍なり。

吾人が肉の感覺即ち器械的の五官なるものは自然的の障碍ありて一切の處一切の時に於て無碍自在に如來の光に接近すべき理あることなし。

されば導師は近縁を釋して曰く、衆生願を發して佛を見んと願すれば即ち佛目前に現じ給ふが故に近縁となづく。

吾人が肉眼は因果律に規定されて無碍なる能はず。此の肉眼の器械的の視覺は自然

の約束を免るゝ能はず。されば時間空間の形式に規定さる。視よ漠々たる曠原洋々たる蒼海吾人が肉眼には彼の水光天に接し千里の波海面は天地渾沌として寔に宇宙の一團體はさまざまに廣大ならざる如くは是肉眼に映し來る天涯なり。抑々此宇宙なるものゝ焉ぞ狭小なるものぞ獨のフェヒネルは宇宙に對する吾人の視感覺は環の内面を見而して觀念なるものは外面を見る如しと。實に瞑想觀念に入つて直觀し來る時は、宇宙の無限なる天涯の無邊なる肉眼の感覺し得る分齊にあらず。吾人が器械的なる肉眼は自然律たる相待の規定を免れず。

又自然界の物質現象たる太陽及び天體の星宿に於ても又然り。

例へば吾人の觀念は光線の速度にして一億萬年を要すべき距離の彼處に恆星ありと觀念すれば吾人の觀念は時間を要せずして直觀す。又時間的に云はゞ吾人は過去無量劫てよ觀念も直觀すること自然なり。此觀念は時間を通じ、空間を通じて無礙自在なり。本來吾人の觀念なるものゝ本體は本如來の大智慧光の理性中の分なるものなる故に吾人は自己の觀念の如くに思はるれども其實は能觀の心と所觀の理と本如來の光明即ち一大觀念態なるなり。

主體たる人の精神の方より云はゞ能動的形式的の理性また觀念等なり、客體なる如來の大智慧光明態の關係なり

如來の光明は觀念の故に無碍なり。

物體を通じて無碍の故に。

嚮きに如來大圓鏡とは宇宙全體を一大觀念としたる心靈なりと説けり。世界の客觀と主觀と即ち物質と精神とは本同一の觀念なりとす。故に吾人が觀念と客觀の物象とは本體同一の故に吾人が冥想觀念に入つて全宇宙を大觀する時は一切物質現象あるに拘らずして吾人が觀念は宇宙を通じて圓通無碍なり吾人が觀念は如何なる金城鐵壁も障碍すること能はず。吾人が直觀は時間空間の約束を超えて而も一切物質の爲に障られず。之全く如來鏡智中の吾人の直觀なればなり。